

ゆりかご電車 おかてるあき

二年生のヒロちゃんは、電車に乗ってピアノのおけいこに通っています。いつも乗る青い電車には不思議なことが起こるのです。それは奥から三番目の窓側の席のことです。ここに座ると、誰もが必ず居眠りを始めるのです。めがねをかけた高校生のお兄さんもお化粧をしたきれいなお姉さんも、髭をはやした威張った小父さんもみんなこっくりこつくりと、すぐに眠ってしまふのです。そのことをお父さんに話してみたのですが、「そんなことあるはずない」と信じてくれません。でも、本当なのです。この日も、ヒロちゃんは、あの席を遠くから見ていました。少し太った小母さんが、やっぱり気持ちよさそうに眠っています。間違いない。あの席は座った人を眠らせる不思議な席だと思いました。

試しにヒロちゃんも座ってみようと思いましたが、寝すごして花園駅を通り過ぎたら大変です。ピアノ教室に行けません。だから

「私は座らない」と心に決めていました。次のおけいこの日、赤ちゃんを抱いた若いお母さんが次の駅から乗ってきました。おむつが濡れているのでしようか、赤ちゃんは泣き始めました。お母さんは優しくだっこし直すのですが、泣き止みません。周りの人も「うるさいなあ」という顔をして見えています。ヒロちゃんにも去年生まれの弟のコウスケがいます。だからお母さんの困った気持ちがよく分かります。お母さんはミルクを飲ませ始めましたが、なかなか泣き止みません。赤い顔がもつと赤くなり涙を流して泣いています。鳴き声が電車の中に響き渡りました。それを見つめるヒロちゃんの心臓もドキドキしてきました。その時、ヒロちゃんはいいことを思いつきました。見ると、あの席が空いています。ヒロちゃんは思い切って話しかけてみました。おばちゃん、あの席に座ってみてください。赤ちゃん泣き止むと思いません。」

ヒロちゃんが指さす先を確かめたお母さんは、少し驚いたようでしたが言われるままに席を移りました。するとどうでしょう。あんなに泣いていた赤ちゃんはすぐに静かになり、うとうとと眠り始めたのです。お母さんも驚いています。お母さんは「どうしてなの？」とヒロちゃんのお顔を見つめました。ヒロちゃんは、「よかった」という顔をしてほほえみました。電車はしばらくして花園駅に着きました。ヒロちゃんはお母さんに頭をさげて電車を降りました。ホームのベルが鳴り、電車が動き始めました。お母さんの口が「ありがとう」と動くのがわかりました。ヒロちゃんは赤ちゃんと手を振りました。お母さんはまだ眠っている赤ちゃんの手を持ってバイバイをしてくれました。その日は、ちょうどヒロちゃんの八歳の誕生日でした。